

泉鏡花「高野聖」(1900年)

「①(こ)ちらの道は(こ)りやど(こ)へ行くので」といって売薬の入った左手《ゆんで》の坂を尋《たず》ねて見た。

(はい、②(これは五十年ばかり前までは人が歩行《ある》いた旧道ですが。やつぱり信州へ出ます。先は一つで七里ばかり総体近(ご)ざりますが、いや今時《いまどき》往來の出来るのじゃあ、ざりませぬ。去年も「坊様、親子連《つれ》れの巡礼《じゅんれい》が間違えて入ったというで、はれ大変な、乞食《こじき》を見たような者じやというて、人命に代りはねえ、追《おつ》かけて助けべえと、巡査様《おまわりさま》が三人、村の者が十二人、一組になってこれから押登って、やつと連れて戻《もど》ったくらいですが。③「坊様も血氣に逸《はや》って近道をしてはなりましねえぞ、草臥《くたび》れて野宿をしてからが(こ)を行かっしやるよりはましでござるに。はい、氣を付けて行かっしやれ。)

④(こ)で百姓に別れてその川の石の上を行こうとしたがふと猶予《ためら》ったのは売薬の身の上で。まさか聞いたほどでもあるまいが、それが本当ならば見殺《みころし》じや、どの道私は出家《しゅつけ》の体、日が暮《く》れるま(ご)に宿《しゆく》に着いて屋根の下に寝るには及《おとよ》ばぬ、追着《おつ》いて引戻してやろう。罷違《まかりち》うて旧道を皆歩行《ある》いても怪《け》しゅうはあるまい、⑤(こ)ういう時候じや、狼《おおかみ》の旬《しゅん》でもなく、魍魎魍魎《ちみもつりよ》の汐《しお》さきでもない、ままよ、と思つて、見送ると早《は》や深切な百姓の姿も見えぬ。(よし。)

⑥(こ)切《おもしき》って坂道を取つて懸《かか》った、快氣《おとこぎ》があったのではござらぬ、血氣に逸《はや》ったではもとよらない、今申したようではずつとも悟《さと》ったようじやが、いやなかなかの臆病者《おくびようもの》、川の水を飲むのさへ氣が怯《ひ》けたほど生命《いのち》が大事で、なせまたと謂《い》わっしやるか。ただ挨拶《あいさつ》をしたばかりの男なら、私は実のところ、打棄《うちや》つておいたに違ひはないが、快からぬ人と思つたから、そのまま見棄てるのが、故《わざ》とするようで、氣が責めてならんだから、

と宗朝はやはり俯向《うつむ》けに床《とこ》に入ったまま合掌《がっしょう》していった。「それで口でいう念仏にも済まぬと思つてさ。」

⑦(こ)かもつれつきの色好み、殊にまた若いのが好《すき》じやで、何か「坊にいうたであらうが、それを実《まこと》としたところで、やがて飽《あ》かれると尻が出来る。耳が動く、足がのびる、たちまち形が変するばかりじや。

いややがて、この鯉を料理して、大胡坐《おおあぐら》で飲む時の魔神の姿が見せたいな。

⑧(こ)妄念《もうねん》は起さず早《はや》こを退《の》かつしやい、助けられたが不思議なくらい、嬢嬢別してのお情じやわ、生命異加《いのちみよが》な、お若いの、きつと修行をさっしやりませ。(とまた一ツ背中を叩《たた》いた、親仁《おやじ》は鯉を提《さ》げたまま見向きもしないで、山路《やまじ》を上《かみ》の方。

見送ると小さくなつて、一座の大山《おおやま》の背後《うしろ》へかくれたと思つと、油早《あぶらひでり》の焼けるような空に、その山の巔《いただき》から、すくすくと雲が出た、滝の音も静まるばかり殷々《いんいん》として雷《らい》の響《ひびき》。

藻抜《もぬ》けのように立つていた、私《わし》が魂《たましい》は身に戻つた、そなたを拝むと齊《ひと》しく、杖《つえ》をかい込み、小笠《おがさ》を傾け、踵《くびす》を返すと慌《あわただ》しく一散に駆《か》け下りたが、里に着いた時分に山は驟雨《ゆうだち》、⑨(こ)親仁《おやじ》が婦人《おんな》に齋《もた》らした鯉もこのために生きて孤家《ひとりや》に着いたろうと思つ大雨であつた。」

高野聖《こうやひじり》はこのことについて、あえて別に註《ちゅう》して教《おしえ》を与《あ》た《え》はしなかつたが、⑩(こ)羽朝快《たもと》を分つて、雪中山越《せつちゅうやまごえ》にかかると、名残惜《なごりお》しく見送ると、ち(こ)らち(こ)らと雪の降るなを次第《しだい》に高く坂道を上《のぼ》る聖の姿、あたかも雲に駕《が》して行くように見えたのである。

宮沢賢治「なめと二山の熊」(1934年)

①(こ)小十郎はもう熊のことばだつてわかるような氣がした。ある年の春はやく山の木がまだ一本も青くならないころ小十郎は犬を連れて白沢をすうつとのぼつた。②(こ)夕方になつて小十郎ははつかい沢へこえる峯《みね》になつた処《ところ》へ「去年の夏《なつ》さえた笹小屋《ささごや》へ泊ろうと思つてそこへのぼつて行つた。③(こ)そしたらどうい(こ)う加減か小十郎の柄にもなく登り口をまちがつてしまつた。なんべんも谷へ降りてまた登り直して犬もへ(と)につかれ小十郎も口を横にまげて息をしながら半分くずれかかつた去年の小屋を見つけた。小十郎がすぐ下に湧水《わきみず》のあつたのを思い出して少し山を降りかけたら愕《おどろ》いたことは母親とやつと一歳になるかならないような子熊と一疋《ひとき》ちようど人が額に手をあてて遠くを眺《なが》めるといつたふう(こ)に④(こ)淡い六日の月光の中を向うの谷を上げしげ見つめているの(こ)にあつた。⑤(こ)小十郎はまるでその一疋の熊のからだから後光が射すように思えてまるで釘付《くぎつ》けになつたように立ちどまつてそつちを見つめていた。すると小熊が甘えるように言つたのだ。

「どうしても雪だよ、おつかさん谷のこつち側だけ白くなつてゐるんだもの。どうしても雪だよ。おつかさん」

すると母親の熊はまだしげしげ見つめていたがやつと言つた。「雪でないよ、あすこへだけ降るはずがないんだもの」

子熊はまた言った。「だから溶けないで残つたでしょう」

「いいえ、おつかさんはあぎみの芽を見に昨日あすこを通つたばかりです」

小十郎もじつとそつちを見た。月の光が青しるく山の斜面を滑っていた。そこがちようど銀の鎧《よろい》のように光つてゐるの(こ)だつた。

「ヘンゼルとグレーテル」

ヘンゼルとグレーテルという母親に捨てられたかわいそうな兄妹がいました。二人は森で道に迷い、森の奥に住む魔女に騙され捕らえられました。しかし二人は隙を見て魔女をかまどに突き飛ばして焼き殺し、寶石や真珠などを持って家に帰ることができました。めでたしめでたし。

芥川龍之介「羅生門」(1915年)

ある日の暮方の事である。一人の下人が、①(こ)羅生門《らしょうもん》の下で雨やみを待っていた。広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗の剥けた、大きな円柱に、蟋蟀《きりぎりす》が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかに、雨やみをずる市女笠や揉烏帽子が、も(こ)二三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。(略)

②(こ)どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいる連《いとま》はない。選んでいれば、築土《つじ》の下か、道ばたの土の上で、餓死《うえじ》をするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き③「盗人《ぬすびと》になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇氣が出ずにいたのである。(略)

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子《ようす》を窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く腫《うみ》を持った面砲《にきび》のある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括《くく》つていた。それが、④(こ)梯子を三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を(こ)こと動かし(こ)ているらしい。これは、その濁つた、黄いろい光が、隅々に蜘蛛《くも》の巢をかけた天井裏に、揺れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。⑤(こ)この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮《やもり》のように足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出るだけ、平《たいら》にしなが(こ)ら、頭を出るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗《のぞ》いて見た。

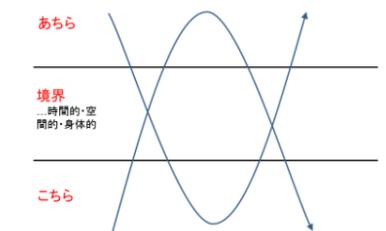
(略) 下人《げにん》は、それらの死骸の腐爛《ふらん》した臭氣に思わず、鼻を掩《おお》つた。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんど(こ)ことこの男の嗅覚を奪つてしまつたからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲《うずくま》つている人間を見た。檜皮色《ひわだいろ》の着物を着た、背の低い、瘦《や》せた、白髪頭《しらがあたま》の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片《きぎれ》を持って、その死骸の一つの顔を覗き(こ)むように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

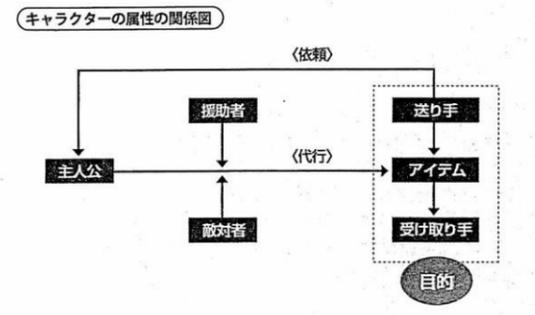
下人は、⑥(こ)六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時《さんじ》は呼吸《いき》をするのを忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身《とうしん》の毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた⑦(こ)死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の尻《しらみ》をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従つて抜けるらしい。

「赤ずきんちゃん」

赤ずきんちゃんという女の子がいました。赤ずきんちゃんはお母さんからパンとぶどう酒をおばあさんに届けるよう頼まれて、森の向こうのおばあさんの家へと向かいました。その途中で一匹の狼に会い、お花を摘んでいったらおばあさんが喜ぶよと言われたので、お花摘みをしてからおばあさんの家へ向かいました。狼は先回りをしておばあさんの家へ行き、おばあさんを食べてしまいました。そしておばあさんの姿に成り代わり、赤ずきんちゃんが来るのを待ちました。赤ずきんちゃんがおばあさんの家に到着すると、おばあさんに化けていた狼に赤ずきんちゃんは食べられてしまいました。満腹になった狼が寝ていたところ、通りがかりの獵師が気付き、狼の腹の中から二人を助け出しました。赤ずきんちゃんはお家に帰り、もう道草はしないよとお母さんに言いました。めでたしめでたし。



大塚英志『神話の練習帳 物語作者になるためのドリル式ストーリー入門』(キネマ旬報社、2011)



これを考案者の名をとって「グレマスの行為者モデル」といいます。いわば、これは物語における「英文法の基本構文」のようなものです。「送